

What patients with pervasive developmental disorders think of and expect from nurses

著者	大江 真吾
著者別表示	Oe Shingo
journal or publication title	博士論文要旨Abstract
学位授与番号	13301甲第4297号
学位名	博士（保健学）
学位授与年月日	2015-09-28
URL	http://hdl.handle.net/2297/44532



平成 27年 8月 24日

博士論文審査結果報告書


報告番号


学籍番号 1127022003

氏名 大江 真吾

論文審査員

主査(職名) 塚崎 恵子(教授) 

副査(職名) 北岡 和代(教授) 

副査(職名) 稲垣 美智子(教授) 

論文題名 What patients with pervasive developmental disorders think of and expect from nurses

論文審査結果

【論文内容の要旨】

他害・自傷行為や他者との相互作用の障害に起因するうつ状態などにより、精神科病棟に入院する広汎性発達障害者（PDD 者）が増えている。しかし、PDD 者への理解や看護ケア等に関する研究は漠然とした知見が散見されるのみである。本研究は入院中の PDD 者に面接を行い、彼らの口から語ってもらい、看護師をどのようにとらえており、何を期待しているかを明らかにすることを目的とした。

PDD 者 10 名（男性 7 名，女性 3 名）を対象に、半構造化面接を行った。面接に先立ち、参加観察を行った。それらの質的データを分析した結果、PDD 者は看護師とかかわる機会が少なく、またかかわりを求める対象ではないととらえることから、看護師は【希薄な存在】であった。また、看護師のかかわりを適切ではないと感じ、自分は理解されていないという思いから、看護師を【理解してくれない存在】ととらえていた。その一方で、PDD 者は看護師の援助やそばで見守るというかかわりによって【安堵感を抱ける存在】として看護師を見ていた。また、看護師と症状について話し合うことや看護師から学びを得ることで【支援してくれる存在】として看護師をとらえていた。それでもなお、障害をもつ自分を理解してほしいという思いや専門職である看護師からの助言を求め、看護師に対して【理解されることへの期待】を抱いていた。PDD 者は、看護師に対して希薄な存在と理解してくれない存在という否定的なとらえと、安堵感を抱ける存在と支援してくれる存在という肯定的なとらえという、アンビバレントなとらえ方をしながらも、関係性を築くことができる看護師に対して理解されることへの期待を抱いていた。

【審査結果の要旨】

他者との関係性を築くことが難しく、自己表現が苦手な PDD 者に対して面接前訪問を重ねた上で、面接を実施し、それらの結果として PDD 者の側から見た看護師像とニーズを明らかにした先駆的な研究であり、学術的に意義があると評価できる。本研究の成果は、PDD 者への看護ケアの方向性を考える際の重要な知見を含んでおり、今後その活用が期待できる。公開審査では、いずれの質問にも適切な応答がなされた。

以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。